

新聞記者の矜持

— 福永先生をお送りするにあたって —

丸 田 博 之

いま、「マスコミ」という。報道関係のみならず、およそ電波や活字を媒体にする組織的な集団は十把一絡げで「マスコミ」の称号が与えられてしまう。そして、その称号はいささか批判的な要素を含み込んでいるとも言える。

考えてみれば、この「マスコミ」には、それぞれ時期や性質上固有の成り立ちがある。新聞の走り瓦版は江戸時代だし、政治的な論調を著わしたいわゆる全国紙は明治。その後、ラジオ、テレビと続いていくのである。中でも特に「マスコミ」という語ともっとも密接な関係があるのはテレビであると言って差し支えあるまい。あるいは、その流布範囲を度外視すれば、初期の瓦版も「マスコミ」なのかも知れない。そのメルクマールはどこにあるのか。もとより、瓦版からテレビに至るまでそれらが購読者や視聴者の「数」を生業(なりわい)の基本に置いていることに違いはない。しかし、新聞は他の三者とは大きな違いがあるように思う。それは、新聞が購読者を自ら「選ぶ」という点にある。瓦版は売上げがすべてである。テレビは視聴率が生命線である。そのためなら、個人のゴシップも扱うし、見る側の興味をそそるものを重点に据えることもある。まさしく「不特定多数」の見る側への働きかけと言える。その点、新聞は伝えるべき内容に厳しさがある。あるいは、厳しさがあるから新聞だと言える。より多くの人に伝えねばならないことに違いはない。しかし、一部の識者にさえ伝わればそれでよい、という潔さも持ち合わせねばならない。「わかってくれる読者」を獲得すること、常に彼らの信頼に答える記事を掲載することは、

新聞の大きな使命である。「不特定多数」が相手ではなく、そこには明らかなターゲットがある。読者を選ぶのである。

福永先生は長く新聞社の学芸部や国際部で健筆を振るわれ、その集大成である書のひとつに『衰退するジャーナリズム』（2010）がある。

ここにその一節を引いてみよう。

民主主義の根幹を支え、社会の地平を切り拓いてきた(中略)メディアのジャーナリズム機能が、確固たる座標軸を喪失して急速に衰退の兆しを見せているように思える

「確固たる座標軸の喪失」、この原因として先生は、メディアが「なりふり構わず“禁断”のコマーシャリズム(商業主義)に傾倒し始めた」ことを指摘されたうえで、その事態が、本来、「ジャーナリズムが死守すべき『言論動機』がいつしか『利潤動機』に浸食され」たとまでの深い洞察を加えられた。

これは、現在の新聞記者のみならず、我々一般の研究者にも重く響く言葉である。論文であれ著作であれ、我々は本当に純粋な「言論動機」を以て文をしたためているだろうか。ややもすれば、業績の数稼ぎや昇任のためだけに、すなわち「利潤動機」によって徒に紙を汚してはいまいか。そして、それは、ひとり研究者の問題ではなく、我が国に於ける大学行政全体に通底することではないのだろうか。

先生は同書を「ジャーナリズムとアカデミズムは提携できるか」という章で終えられている。そこでは、ジャーナリズムの衰退と歩を共にするアカデミズムの現状が痛烈に批判されている。同書は2010年発刊であり、2004年度の国立大学独立行政法人化から始まり、2015年度の学校教育法改訂に至る我が国の教育行政の移り変わりを、時代的にはside by sideで、しかし、内容では常に一步先じた形で時世を捉え、警鐘を鳴らしている。これが、「言論動機」に他なるまい。

この、ややもすれば激しいコマーシャリズムの流れに流されてしまいかねない時代にあって、それに抗う度量を持った指導者を失うことは、本学

にとって慙愧に堪えない。定年なる取り決めに恨むしかない。だが、定年がすべてを消し去るわけでもない。長年に渡って示された「新聞記者の矜持」は静かに、けれど脈々と受け継がれているに違いない。

危なっかしい身の上を恥じながらも、拙文を以て、今後ますます日本のジャーナリズムの発展に貢献される、また、して頂かねばならぬ先生へのはなむけの言葉としたい。

